



第1編 青年期と人間としての生き方

第1章 青年期の課題と自己形成	6
第1節 人間性の特徴	6
人間とは何か	
〔視点〕 人間—解き難い謎にみちた存在	6
〔発展資料〕 善と悪との合金としての人間	8
第2節 青年期の意義と課題	9
①. 青年期とは	9
〔視点〕 過渡期としての青年期	9
〔発展資料〕 モラトリアム人間	11
②. 青年期の心理的問題	12
〔視点〕 生活を見つめる	12
〔発展資料〕 青年期の心理—文学作品にみる	14
③. 現代青年の自己形成	15
〔視点〕 進路を考える時期	15
〔発展資料〕 進路をどう考えるか	17
第2章 人間としての自覚	18
第1節 人間と哲学—古代ギリシア哲学	18
古代ギリシア哲学—哲学の源流	
〔視点〕 哲学とは何か	18
1. 最初の哲学者たち	19
2. ソフィスト	21
3. ソクラテス	22
〔発展資料〕 もの識りであるということと賢いということ	24
4. プラトン	25
〔発展資料〕 愛知（哲学）者の魂の根底	27
5. アリストテレス	28
6. ヘレニズム期の哲学	30
第2節 人生と宗教	31
①. キリスト教の思想	31
〔視点〕 キリスト教—西洋思想のもう一つの源流	31
1. 旧約聖書の思想	32
2. イエス	33
〔発展資料〕 何度まで救済すべきでしょうか	35
3. パウロ	36
4. アウグスティヌス	37
②. イスラム	38
〔視点〕 イスラムと現代世界	38

1. マホメット（ムハンマド）	39
〔発展資料〕 人間は本来弱いもの	40
③. 仏教	41
〔視点〕 インドの伝統思想と仏教	41
1. 仏陀	42
〔発展資料〕 仏教の原型	44
2. 大乘仏教	45
テーマ学習 ① 宗教的立場と科学的立場	46
第3節 人間と道徳—中国の思想	48
①. 儒教思想	48
〔視点〕 中国の伝統思想としての儒教	48
1. 孔子	49
〔発展資料〕 徳治主義	51
2. 孟子	52
3. 荀子	53
〔発展資料〕 人の性は善か悪か	54
②. 老荘思想	55
〔視点〕 道教の伝統	55
1. 老子	56
〔発展資料〕 聖人の処世	58
2. 荘子	59
第4節 人生と芸術	60
人生と芸術—美と芸術のよこぎ	60
〔視点〕 美を求め心	60
1. 美と芸術の世界	61
〔発展資料〕 技がなければ、人間的とはいえない	63
第1編・参考図書	64

第2編 現代社会と倫理

第1章 現代社会の特徴	66
①. 核家族化の時代	66
〔視点〕 漂流する家族	66
〔発展資料〕 新しい家族関係を求めて	69
②. 高齢化社会の到来	70
〔視点〕 急速な高齢化	70
〔発展資料〕 老人と現代	73
③. 情報化社会	74
〔視点〕 多情報社会	74
〔発展資料〕 ホモ・イマジナリス—情報化時代の新しい人間像	77

4. 国際化の時代	78	3. レーニン	124
[視点] 多民族共生社会	78	4. 毛沢東	125
[発展資料] 日本人の国際化の条件	80	5. 社会民主主義	126
テーマ学習 2 文化とは何か		6. フェビアンイズム	127
— 異文化をどう理解するか	81	[発展資料] ソ連社会主義は敗北したのか	
— 歴史の中のソ連社会主義	81	— 歴史の中のソ連社会主義	128
第2章 現代社会を生きる倫理	83	②. 実存主義的思想	129
第1節 近代の倫理思想	83	[視点] 実存主義とは何か	129
①. ルネサンスと宗教改革の思想	83	1. キルケゴール	130
[視点] ルネサンスと宗教改革—古典への回帰		[発展資料] 神を前にしての絶望は罪である	
— 「死にいたる病」をよむ	83	— 「死にいたる病」をよむ	132
1. ルネサンスの思想	84	2. ニーチェ	133
2. ルター	85	[発展資料] ニヒリズムとは何か	135
3. カルビン	87	3. ハイデッカー	136
[発展資料] 世俗外的禁欲から世俗内的禁欲へ		4. ヤスバース	137
— 資本主義の精神の生成	88	5. サルトル	138
②. モラリストの思想	89	③. プラグマティズム	140
[視点] “哲学的精神”とは何か	89	[視点] プラグマティズムとは	140
1. モンテーニュ	90	1. パース	141
2. バスカル	91	2. ジェームズ	142
[発展資料] 中間者であるという意識	92	3. デューイ	143
③. 近代科学の成立	93	[発展資料] 探究の理論としての論理学	145
[視点] 近代科学はどう成立したか	93	第3節 現代の倫理的課題	146
1. 近代科学の成立	94	①. 生命への畏敬	146
2. ベーコン	95	[視点] 他の存在へのいたわり	146
3. デカルト	96	1. シュバイツァー	147
[発展資料] 環境破壊をもたらしたデカルトの呪縛	98	[発展資料] 「生命への畏敬」の実践	148
テーマ学習 3 人間にとって、自然とは何か?	99	2. ガンジー	149
— 人間にとって、自然とは何か?	99	[発展資料] 非暴力主義の可能性	150
④. 社会契約説	101	テーマ学習 4 生命とは	151
[視点] 市民社会の概念	101	②. 自己実現の心理学	153
1. ホッブズ	102	[視点] 近代の人間観をこえて	153
2. ローク	103	1. フロイト	154
3. ルソー	105	2. ヨング	155
[発展資料] 自然に帰れ	107	[発展資料] 母なるものの強大な力	157
⑤. ドイツ観念論	108	テーマ学習 5 幸福とは何か?	158
[視点] カント哲学とドイツ観念論	108	③. 愛と奉仕	160
1. カント	109	[視点] 愛と慈悲	160
[発展資料] 「アイヒマン裁判」で問われたもの	111	1. マザー・テレサ	161
— 「アイヒマン裁判」で問われたもの	111	2. 神谷美恵子	162
2. ヘーゲル	112	[発展資料] 絶望との闘い	163
[発展資料] “現実”をとらえる根源的思考	113	④. 科学技術の発展と新しい倫理の課題	164
⑥. 功利主義の思想	114	[視点] エコフィロソフィーの視点	164
[視点] ベンサムと「哲学的急進派」	114	1. 環境倫理	165
1. ベンサム	115	2. 生命倫理	166
2. ミル	116	3. 巨大技術の問題	167
[発展資料] 真の福祉国家とは	117	⑤. 民主社会の実現に向けて	168
第2節 現代の倫理思想	118	[視点] 民主主義と人間	168
①. 社会主義の思想	118	1. 共に生きる社会	169
[視点] 社会主義の出現	118	2. 差別と偏見の克服	170
1. 初期の社会主義思想	119	[発展資料] 憲法はまだこれからだ—差別を越える子どもたちに期待	171
2. マルクス	121	第2編 参考図書	172
[発展資料] 人間解放のためのプログラム	123		

第3編 国際化と日本人としての自覚

第1章 日本の風土と日本人の考え方 174

日本の風土と日本人の考え方 174

[視点] 日本人の考え方の原型 174

1. 古代日本人の自然観・宗教観 175

2. 古代日本人の倫理観 176

第2章 外来思想の受容と日本の伝統 177

第1節 仏教の受容と展開 177

1. 仏教の受容と日本化 177

[視点] 神と仏—仏教伝来をめぐって 177

1. 聖徳太子 178

[発展資料] 法隆寺の創建 179

2. 最澄 180

3. 空海 181

2. 鎌倉仏教 182

[視点] 鎌倉仏教の成立 182

1. 新仏教の旗手 183

2. 親鸞 184

[発展資料] 親鸞の救いの論理 186

3. 道元 187

[発展資料] 坐禅は安楽の法門 189

4. 日蓮 190

[発展資料] 法華経に学ぶ人生 191

第2節 儒教の受容と展開 192

近世日本における儒教運動の展開 192

[視点] 儒教運動の台頭 192

1. 朱子学派 193

2. 中江藤樹 194

3. 山鹿素行 195

4. 伊藤仁斎 196

[発展資料] 「誠」の儒学の成立—日本的な

純粋性の追求 198

5. 荻生徂徠 199

[発展資料] 荻生徂徠と現代 201

第3節 国学と民衆の思想 202

1. 国学の成立 202

[視点] 国学の誕生をめぐって 202

1. 本居宣長 203

[発展資料] 「日本人」問い続けた宣長 205

2. 民衆の思想 206

[視点] 民衆の人間としての自覚と反省 206

1. 石田梅岩 207

2. 安藤昌益 208

[発展資料] 昌益と現代 209

3. 二宮尊徳 210

第4節 日本の近代化と西洋思想 211

1. 西洋思想の摂取と日本の近代化 211

[視点] 日本の近代化と日本人の意識構造 211

1. 福沢諭吉 212

[発展資料] 「脱亜論」と日本の進路 214

2. 中江兆民 215

[発展資料] 兆民の思想と日本国憲法 216

2. 国権主義の台頭 217

[視点] 国権保存主義の潮流 217

1. 三宅雪嶺 218

2. 西村茂樹 219

3. 近代日本とキリスト教 220

[視点] 近代日本とキリスト教の移植 220

1. 内村鑑三 221

[発展資料] 足尾銅山鉱毒事件と内村 222

4. 近代日本の社会思想 224

[視点] 近代日本の社会主義と民主主義 224

1. 社会主義の思想家 225

2. 吉野作造 226

[発展資料] 吉野作造と朝鮮—民本主義の

対外的適用 227

第5節 近代的自我と伝統 228

1. 近代的自我の苦悩 228

[視点] 近代化と伝統—近代日本の文明史的位

置 228

1. 夏目漱石 229

[発展資料] 近代知識人の自己矛盾 230

2. 森 鷗外 233

2. 近代日本の独創的な哲学と思想 233

[視点] 西田哲学への距離 233

1. 西田幾多郎 234

[発展資料] テクノロジー時代への課題

—「絶対無」の思想の今日性 236

2. 和辻哲郎 237

3. 柳田国男 238

第3章 世界の中の日本人 239

1. 人類の福祉と世界の平和 239

[視点] 人間の尊厳性をどう実現するか 239

[発展資料] 平和の心はどこに生まれるか 241

2. 地球と人類社会 242

[視点] 地球市民の自覚と共生 242

[発展資料] 地球を救え—世界からの行動と

変革のメッセージ 244

第3編・参考図書 245

●付録/倫理想史年表 246

●索引 255

第2章 人間としての自覚 / 第3節 人間と道徳—中国の思想

1 儒教思想—「仁」と「礼」の道徳思想

視點 中国の伝統思想としての儒教—家族を尊重する教え

中心の思想・儒教

中華世界に一貫した文明があるとすれば、それは儒教によって色濃く染め上げられているものである。儒教は、ここではヨーロッパ世界におけるキリスト教に匹敵する比重を占める。

儒教は孔子によって体系化された。孔子はもっとも「仁」を重んじ、これを人間の最上の美德としたが、明確に定義してはいない。「仁」の字が、「人」と「二」をくみあわせてできているから、人間は、二人以上が助けあっていかなければならないのだ。そこで、人間どうしを結合する力が必要で、これが仁である、という解釈がある。

儒教、すなわち孔子の教えを総合的にみると、儒教は家族を中心とし、家族を尊重する教え、道徳であるといえよう。その中心徳目が「孝」である。「孝」は親子関係の徳目であるが、親と子は平等ではなく、子が親にまごころを尽くすことが要求されている。……

儒教が社会的強制力をもったのは、権力者がこれに注目し、利用したからである。秩序や習慣を重んじるその教えは、権力を安定させるうえで有効であった。さらに、儒教のもうひとつの特色、「礼」の尊重は朝廷の儀式を威厳あるものにした。こうして儒教は道徳であるばかりでなく制度でもあった。このため、自発的にこれが守られるというよりは、形式のみを重んじられ、人間性に反するものとなった。

とりわけ、「孝」や「貞節」の教えは、多くの犠牲者を生じ、社会を硬めようにもなった。1919年、北京を中心に近代化をめざす文化運動、「五四運動」が発生すると、儒教や孔子にたいする批判が猛烈とたかまったものである。とはいえ、儒教の徳目に反する行為が賞讃されるとはかぎらない。

儒教がその教えの眼目とする家族関係の尊重は、現在の憲法（1982年採択）にも生きている。……

よみがえる孔子

儒教というと、孔子、そしてかれの語録である「論語」が想起される。……かれは儒教の創始者といわれるが、まったくなにもないところで儒教をつくったのではない。すでに、「儒」と呼ばれる職業的な人間がいて、儀式

をつかさどったり、哲学的な問題を説いたりしていた。それをかれは集大成し、あるものは棄てた。

孔子は魯国において、こんちでいう司法大臣が、警視總監といった役職についたが、のちは政治的に不遇で、晩年はもっぱら学生に教育することにうちこんだ。かれは「教えありて類なし」といっている。この言葉には、さまざまな解釈があるが、「どのような人間であっても教育しよう。出身の地域や等級の種類で差別はしない」という趣旨にとることができよう。ここにかれが教育に注いだ情熱をみることができる。

孔子の教えが国家権力と結びついたのは漢王朝のときからで、これは国家を安定させるうえで、つごうがよかったからである。君は君に、子は父に、妻は夫に服従せよ（これを「三綱」という）、というのは、儒教の重要な教えであった。

かれは歴代の王朝によって尊崇をうけ、称号をおくられた。……それだけに反発も強く、すでにのべたように「五四運動」のとき、孔子反対、儒教反対がさげばれた。また1966年にはじまる文化大革命のさいには、紅衛兵によって山東省曲阜の孔子廟や孔子の子孙が生活する邸宅などが、破壊された。……

しかし、最近では、曲阜の孔子廟は改修され、かれの誕生日に盛大な記念式典がおこなわれた（1984年9月22日のことである）。（竹内実『現代中国の展開』NHKブックス）

現代中国によみがえる孔子

家族を中心とし家族を尊重する中国人の生き方は、孔子によって「仁」と「礼」を原理とする儒教として体系化され、歴代王朝の政治原理として採用されたが、中国の近代化・民主化の中で一掃否定された。だが、今日なお、孔子の教えには否定しえないものがある。



山東省曲阜の孔子廟・大成殿

孔子廟は、孔子の生まれた山東省曲阜にある孔子をまつる大聖堂で、孔子の没した翌年、孔子の旧居を廟に改装し、定期的にまつりを行なったのがその始まりといわれる。本殿の大成殿には孔子とその高弟の像が安置されている。

① 五四運動 1919年5月4日、北京で始まった愛国民族運動。パリ講和会議で二十一ヶ条協定の要求が拒否されたことから中国民衆が激怒、中国の民主主義革命の発端となった。

② 歴代王朝による孔子の称号
漢— 褒成宣慰公
唐— 文宣王
宋— 至聖文宣王
元— 大成至聖文宣王
明— 至誠先師
清— 大成至聖文宣先師

③ 文化大革命 1966-70年代初頭、プロレタリア文化大革命の略。中国共産党の路線闘争から起こった権力闘争。80年以降の中国は文革を「重大な誤り」として否定している。

漱石の思想を考える

近代知識人の自己矛盾

— 漱石文学の現代的意味

発展資料

引用資料は、漱石の国民作家としての不滅性の根拠を、ポスト・モダン(脱近代)の思想家・蓮實重彦氏の所論をもとに評論家の渡辺直己氏が考察したものである。漱石は、近代日本の知識人として、日本的なものと西洋的なもののはざままで苦悩を強いられたが、その苦悩のすがたは、現代の世界が直面している近代主義(ここでは、排除=選別の力学、代表という観念と手法などのことばに注意)への反省、すなわちポスト・モダンの反理性中心主義・反西洋中心主義とおなじ問題性をもつものであったのであり、そこに、漱石の文学が現代日本人にも読み継がれる理由があるという。

漱石文学の不滅性

漱石は、一面においてはいわば、「明治」という向上する時代そのものの申し子であったといえる。しかし、それは他方において、彼が時代の本質的な矛盾にたえず苦しめられてきた存在であったことを意味していよう。斯るまでもなく、その矛盾とは、明治の日本を襲ったあまりにも急激な西洋化=近代化の激流に根ざしている。その激流のなかで、みずからの血肉にしみこんでいる「日本」的な(もしくは「東洋」的な)ものと、「西洋」の圧倒的な文物とをどのように融合させればよいか。「和魂洋才」の大エリートとして、漱石は、明治の知識人たちの誰もが直面しなければならなかったこの課題に、誰よりも深くとらわれてしまう。そこでは、「洋才」を身に帯びれば帯びるほど、いっそう強く、その「和魂」が傷つき、「和魂」に殉じようとするほど「洋才」の世の理想を逸するといった矛盾と葛藤がつきまとう。

こうしたきわめて時代的制約こそが、じつは、漱石文学の時代をこえた生命の源泉であったという逆説に注目してみたいのだが、ここから先がかなりやっかいなことになるならば、「洋才」とは何か。「和魂」とは何か。そして、両者の間の矛盾や葛藤が、漱石をどのように動かし、その作品とどうかかわるのか。また、そのことが現代においてもなぜ不滅の問題や魅力をもってくるのか。——……

「甲」と「乙」の戦い

この点についてもっとも刺激的な見解を記しているのは、「反=日本語論」の蓮實重彦である。蓮實氏はそこで、落英中の漱石は、いわば「西洋の原理」そのものの野蛮さに直面し、骨の髄までそれに苦しめられたのだと喝破する。……蓮實氏のいうその「原理」とは、「西洋」的な制度、文物、思考の合理性の根底を支配する排除=選別の力学である。この力学は、「猫」を執筆中の漱石じしんのノートには次のように書きとめられている。

二個の者がsame spaceをoccupyする訳には行かぬ。甲が乙を追い払うか。乙が甲をき除けるか二法あるのみじゃ。

「同一の空間」を異なった二つのものが同時に「占有」することはできないというこの命題は、何かの書物からの引用と思われるが、神経衰弱の自己治療をかねて「猫」を書きつつある漱石にとって問題だったのは、じつは、ここにいる甲と乙とのあいだの容赦のない葛藤にほかならない。その空間の占有者として、かりに甲が選ばれるとすれば、それは同時に、この場所から乙が弾きだされることを意味している。こうした排除=選別がたえず露骨に野蛮に機能することの生々しさこそが、漱石を悩ます。……

いまして氏の論旨をたどっておくと、そのままでは血脈



書斎の漱石(明治39年3月)

い抗争によって決着をみるよりほかにないこの葛藤を緩和するために、「西洋」の近代社会が手に入れたものが、「代表」という観念と手法だということになる。

つまり、選ばれた甲は、弾きだされる乙に成り代わって、その「空間」で乙が行使できたかもしれぬ権利や欲望を代行してやることもでき、その場合、両者間に作用する排除=選別の暴力的な本質が隠される。この代理性や代行性を介して、甲は、自分が選ばれることによって乙をまさに排除したことを忘れ、乙もまたそれを忘れることができる。甲はむしろ乙を「代表」するものとして堂々とその場所を「占有」し、乙は甲によって「代表」されてある自分に安堵してその場から引き離される。こうした関係を典型的にあらわしているのが、いっまでもなく、近代の代議政体であり、……排除=選別の本質的に野蛮な暴力は、ここで、選挙に立候補した者たちのあいだにではなく、当選した甲と、彼を選んだ数々の乙との関係のうちに存在する。この両者間に原則としてたえず噴出してありながら、その力は同時に、「代表」という観念と手法によって、いまや誰もそれを暴力と感じぬ程度にまで、和らげられ、隠されているのである。逆にいえば、そのようにして緩和され隠蔽されてあることによって、排除=選別の原理は、いつまでも延命し、たとえばそうした「合理」のしつこさこそ、漱石の骨身にしみだ「西洋」だったと蓮實氏は指摘する。卓見であろう。

実際、ひとたび氏の視線を共有すると、漱石を「不愉快」のきわみに導く「西洋」というもののすがたが、「物質文明」とか「契約社会」とかいった紋切型をこえた生々しきで迫ってくるのだが、ここで見逃してならぬのは、当の漱石もまた、同じ原理にしたがって、英国へと送りだされた存在であったという点である。「選ばれ」てこの地にある彼はしかし、英文学との不和に悩んで、「代表」としての機能をまっとうできずにいる。「不愉快」はしたがって、二重に「西洋」的な脅迫として彼を苦しめる。彼はそこで、たんに英国だけにでなく、英国における彼じしんの存在の根拠そのものを支える「西洋」の原理によってもまた、「しつこく」苦しめられるのだ。大学卒業当時の「何となく英文学に欺かれたる如き不安」が、留学中の「神経衰弱と狂気」にまで高まった理由はおそらくここにあるのだが、いま一步つきつめるなら、このいわばきわめて原理的な病の根幹には、排除=選別の力学を作動させるそもそもの要因、すなわち差異にたいする違和感がひそんでいるだろう。甲と乙が「同一空間」を同時に占有できないのは、両者がまさに、互いに異なっているからであった。

(渡辺直己「解説」『坊ちゃん』集英社文庫)